

黒崎 浩行 提出 学位申請論文

『現代日本社会における神道文化の役割と課題に関する
宗教社会学的研究—地域再生・メディア・災害復興—』
審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、21世紀の日本社会において日本の諸宗教が担っている文化的側面について、神社神道に主たる焦点を当てたフィールドワークを各地において重ね、そこで得られた知見に基づいて、宗教社会学的な観点からの分析を行ったものである。補足的に他の宗教との比較も行われている。

全体は大きく3部に分かれている。「第1部 地域再生と神社」では、少子高齢化や過疎化といった急速に進行しつつある課題を抱えた地域において、神社、神職、祭礼などが果たす役割を論じている。ここにおける諸組織を社会関係資本という観点から分析する。「第2部 メディア・コミュニケーション環境と神社」では、神社や伝統仏教宗派のインターネット活用の現状を分析する。インターネットの活用についても、社会関係資本という観点から、これが地域社会のつながりの回復にどのように機能しているかを分析する。「第3部 災害・復興と神社」では、2011年3月の東日本大震災とその後の復興過程に焦点を当て、神社神道や他の宗教の活動を分析する。

「第1部 地域再生と神社」は四つの章からなる。「第1章 渋谷の

住宅地と神社祭礼」では渋谷の住宅地としての歴史を概括した上で、2000年代以降の氷川神社、金王八幡神社の神社祭礼と町会との関わりを参与観察し、神社祭礼のもつ地域ケア、コミュニティケアという機能について論じている。この際、神道研究者の櫻井治男が提示した、神社の福祉文化資源を自然的環境、文化の伝承・創造環境、人的・社会的組織環境の3つから見ていくという視点を援用している。

「第2章 都市生活における共存と神社の関わり」では、社会学者のアーヴィング・ゴッフマンの「儀礼的無関心」論を踏まえながら、そうした現代社会特有の儀礼的無関心と「安心」の間に位置する「共存」というあり方に着目し、これを「プレイセンター・ピカソ」、「鎮守の森」、「NPO ちんじゅの森」といった団体の活動についての調査から論じている。ロバート・パットナムがソーシャルキャピタル論において結束型と橋渡し型を区分したことを踏まえ、こうした団体の活動は橋渡し型として機能していると結論する。

「第3章 神社祭礼におけるコミュニティ参加機会の創出」では、人吉市青井阿蘇神社の「おくんち祭」を対象として取り上げ、これが主として「地域コミュニティの目的変化」に関わっていると分析する。

「第4章 地域再生における宗教文化資源としての神社」では、神社がアニメ聖地巡礼の対象となっている鷲宮神社の事例やパワースポットの対象となっているいくつかの事例を取り上げる。神社関係者にはこれらに対して批判的な意見も存在することを紹介しながら、これらの現象が、「幻想でしかない共同体への人びとの郷愁と憧憬」という観点から

分析する。

「第2部 メディア・コミュニケーション環境と神社」は二つの章からなる。「第5章 インターネットと神社の関わりをめぐる議論」では、神社本庁が発行する月刊誌である『若木』の中から、インターネットに関わる記事を詳細に調べ、神社界のインターネット利用の変化について論じている。日本全体におけるインターネットの利用動向及び宗教界における動向との比較をしながら、神社のインターネット利用の少なさを指摘する。同時にインターネットの利用の仕方によっては「尊厳性の護持」に問題が生じるという見解が、神社本庁から出されたことにも論及している。

「第6章 伝統宗教のインターネット利用と社会関係資本の形成」では、神社界だけでなく、宗教界全般がインターネット利用によって、これまでの地域社会とのつながりがどう変化しつつあるかを具体的事例に沿って論じる。浄土真宗や臨済宗の僧侶、神社の宮司、金光教の教師のインターネットを用いた新しい活動には、ソーシャルキャピタル論からすると、地域社会のつながりの回復の他、とりこぼされたものを拾うという機能があることを論じている。

「第3部 災害・復興と神社」は本論文の中核をなす部分であり、七つの章からなる。「第7章 東日本大震災の被災地域再生に宗教が果たす役割」では、東日本大震災と復興過程における宗教関係者の活動について参与観察を通じて論じる。とくに震災直後に発足した「宗教者災害支援連絡会」、「宗教者災害救援ネットワーク」、そして著者自身が協力

した「宗教者災害救援マップ」が目指したものを分析している。祭礼の復興度が村落のレジリエンスと正比例するわけではないと指摘しながらも、これらが果たしている社会的機能を「伴走者」・「伴走型支援」と結論づけている。

「第8章 震災支援・復興に神社が果たす役割と課題」でも、東日本大震災の復興に関わる調査結果を論じている。とくに無形民俗文化財という社会的にはあまり注目されていなくても、地元住民にとっては心の支えになっているような文化資源の復興に関わる行為の意味について考察している。

「第9章 ふるさと再生の困難さと向き合う」では、東日本大震災で大きな被害を受けた南相馬市の神社の例を取り上げ、「宗教の公益性」の問題を「公益の宗教性」という視点を導入して、祭り・芸能の復活が地域住民にとって持つ意味を論じている。

「第10章 宮城県気仙沼市におけるコミュニティ復興と神社」では、気仙沼市の複数の神社における復興の諸相をレジリエンスという概念を参照して論じる。アクション・リサーチという研究方法を使いながら、神社と住民・氏子の互恵的關係について分析している。

「第11章 災害復興における生業の持続・変化と宗教文化」では、宗教文化のレジリエンスへの寄与を、地域社会の無形文化財の担い手と研究者との接近・協働で確認されるものは何かを議論している。

「第12章 避難と帰還の狭間」では、櫻井治男の論じた「福祉文化資源としての神社」という分析枠を援用し、神社が有する「自然的環境」

「文化の伝承・創造環境」「人的・社会的組織環境」という三つの方向から復興への神社の関わりを論じている。

「第13章 渋谷の防災・減災と宗教施設・宗教文化」では、被災地での調査を参照しながら、著者にとって身近な地域社会である渋谷区における災害と神社の関係について歴史的な経緯を踏まえた上での現状分析を行っている。

「結論」においては、現地調査で得られた視点が、デュルケムやテイリッヒらに代表されるマクロな視点が見落としがちな点を再構築するために必要であることを述べている。「社会的統合」という分析枠よりも「社会的包摂」という分析枠が神道文化の特徴を捉える上で有効であると結論している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、神社がもつ宗教文化、とくにその福祉文化資源という側面に焦点を当てながら、東日本大震災で被災した神社、またその他の地域でさまざまな災害を体験した地域における神社、さらに神道教団そして一部の寺院を調査対象として、包括的な議論を試みた点に優れた点がある。

現代の神社神道の研究は、さまざまな視点からおこなわれているが、宗教社会学の分野では、とりわけ都市化、産業化、あるいはグローバル化がもたらす影響についての研究が注目されるようになってきている。

本論文はとりわけ災害を経験した地域社会における神社やその他の宗教施設の主として潜在的機能に焦点を当てることで、宗教がもつ文化面の社会的機能を論じた意欲的な研究である。アクション・リサーチという、従来は神道研究においてはあまり見られなかった手法をとっての研究であることも注目される。

焦点は神社神道に置かれているが、その特徴を把握するため、いくつかの神道系教団、さらに仏教寺院の活動にも目を配っている。多くの神職、そして教団関係者や僧侶への面談調査等で得られた知見をもとに、いわばグローバルな視点で議論を展開していて、新しい分野を開拓する研究である。グローバルな視点とは、情報時代がもたらした日本宗教への影響を踏まえつつも、それぞれの地域社会で起こっている問題に即して議論を構築していこうとする点である。

著者はインターネットを活用した情報の収集とその分析に秀でており、東日本大震災に際しても、「宗教者災害救援ネットワーク」のフェイスブック立ち上げに参画し、「宗教者災害救援マップ」を作成している。自然災害が宗教施設にどのような影響をもたらすかについての研究に実践的に関与している。こうして形成された包括的な視点を、個々の地域におけるフィールドワークにも採用している。

とくに注目しているのは、無形文化としての宗教儀礼、あるいは民俗芸能などである。大規模な自然災害においては、建物の崩壊や経済的な損失に加え、無形文化の継承が危機に陥る。物理的に人々がそれまで住んでいた地域から離散して生活せざるを得なくなるということは、無形

文化の担い手が離散することをも意味する。その復興はいかにして可能で、そこに神職等がどう関わっているかが論じられている。

こうした議論で再三用いられているのが、レジリエンスという概念である。これは祭や儀礼を単に元通り実施するというだけでなく、生き生きとした再興へと至る営みと理解できる。レジリエンスにおいて、宗教文化はどのような機能を果たしているかという問いをもって個々の事例を分析していることが本論文の一つの重要な特徴である。地域とのつながりという機能においては、新宗教や民間祈祷師との競合も生じることに言及しており、地域の宗教文化の継承も複雑な人間関係の中に進行することも示している。

多くの事例を調査したことで、レジリエンスはきわめて複雑な要因に絡められていくことが明らかにされている点は重要である。ただそれらを包括するような結論は必ずしも整然として提起されていないが、それは実際の地域社会に即した研究において直面するさまざまな要因を関係づけることの難しさを示していると言える。これらをさらに検討し、他の地域における議論への枠組みとしていくことが、今後の重要な課題として指摘できる。

21世紀にはいり日本でも次々と大きな災害が起これり、複数の事例と関わらざるを得なかったという事情を考慮しても、個々の事例についての分析、そして分析の論拠となる理論についての検証においては、やや不十分な場合がみられるのは否めない。

しかしながら、これまでの現代神道研究において顧みられることの

少なかった災害からの復興における神社の地域社会での機能、宗教文化資源としての潜在的機能について、各地で調査を重ね分析した研究は、きわめて貴重である。今後の同様の視点に立った研究にとって、参照しなければならない視点と事例を数多く提示している。

以上の審査結果によって、本論文の提出者黒崎浩行は博士（宗教学）の学位を授与せられる資格があると認める。

平成 30 年 10 月 11 日

主査	國學院大學大学院客員教授	井上順孝	㊟
副査	國學院大學教授	石井研士	㊟
副査	東京工業大学教授 國學院大學兼任講師	弓山達也	㊟

黒崎 浩行 学力確認の結果の要旨

下記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（宗教学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成 30 年 10 月 11 日

学力確認担当者

主査	國學院大學大学院客員教授	井 上 順 孝	㊟
副査	國 學 院 大 學 教 授	石 井 研 士	㊟
副査	東 京 工 業 大 学 教 授	弓 山 達 也	㊟
	國學院大學兼任講師		